

Title	言語接触と文化伝播
Author(s)	井本, 英一
Citation	大阪外国語大学論集. 9 p.141-p.148
Issue Date	1993-09-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79606
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

言語接触と文化伝播

井 本 英 一

Contact of Languages

Eiichi IMOTO

近代国家のような国境が確定しない時代には、ひとつの集団と他の集団の境界は、固定している場合もあれば、不安定に揺れ動く場合もあった。境界面ぎりぎりまで、集団によって占拠される場合もあったが、界面は一種の真空地帯を形成し、それでも両側の集団によって、それを侵犯することは、タブーとされた。集団は2つにかぎらなかった。3つ以上の集団が隣接するのがふつうであった。それぞれの集団は、同一言語の方言を話す場合もあったし、まったく異なった系統の言語を話す場合もあった。人種的にも、民族・部族的にも、多くの場合が想定できた。それらの集団の全部が定住に近い、移動性の少ない、土地に生産物を求める人々であるか、一部の集団が、定期的に、あるいは不定期的に、他の集団と接触し、広い地域を移動する人々であるかによって、界面の状況はちがってきた。

界面では、各種の生活様式をもった集団が交易をおこなった。界面は、山と平野の接面である山麓であったり、海と陸地の接面である海浜であったりした。あるいは、川や道路などのような、自然の境界があった。このような界面は、真空地帯で、一見、無主の感を与えるものであった。それは、どの集団にも属さないが、第三者によって支配されているのではないかという、漠然とした怖れを喚起した。このような場所に、各種の集団が集まって交易をした。

界面には、境界を明示する、巨大な自然の磐石があった。そのような石が存在しないときは、巨石を運搬して設置したり、人の頭くらいの石を積み上げて円錐をつくり、それに代えた。これらの磐石の上には、それを礎石として、内部が真っ暗な建造物が建てられた。巨大な建造物になると、高さ数十メートルにも達する塔になった。小型のものは、アラビアのメッカにあるカアバ神殿のように、高さ2メートルの人工の境界石上に、高さ10メートルの部屋が建てられている。もっと小型のものは、賽の河原の円錐形の積み石で、その上には、暗い部屋はついていない。この種の石は、境界石であり、礎石であり、祭壇であった。現代でも、礎石の下に供物を投入する。古代では、鎮壇具を供えた。このような場所は聖地となり、毎年、多くの部族が巡礼した。エルサレムが、ユダ

ヤ教徒・キリスト教徒・イスラム教徒の聖地とされたり、スリ・ランカのアダムス・ピークの山頂の磐石が、ヒンズー教徒・仏教徒・イスラム教徒・ユダヤ教徒・キリスト教徒の巡礼地とされたりするように、聖地には、さまざまな宗教を奉ずる、さまざまな集団が訪れた。祭日には聖地では市が立ち、奇術のような見世物の催しがあり、詩人たちは、各自が所属する集団の言語で、彼らの始祖たちの功業をたたえる叙事詩をうたった。人々は、聖地に運んできた物品を、見知らぬ部族の人々の物品と交換した。言語が通じない場合は、いわゆる「沈黙交易」の手段によって行った。

バベルの塔の伝説が、『旧約聖書』の「創世記」第11章にある。ノアの子らから、洪水のあと、地上の諸国民ができた。彼らは同じ言語を話していた。彼らは、町と塔を建て、塔の頂上を天に届かせようとした。神はこれを見て、彼らのことばを乱し、たがいに通じないようにした。こうして神は、人々を全地に散らしたので、彼らは町をつくるのを止めた。これによって、その町の名はバベルと呼ばれた（1-9節）。バベルという語は、アラム語のバルベル、ヘブライ語のバラル（いずれも「混乱させる」の意）と関係があるのではなく、パーブ・イル、つまり「神の門」という意味である。神の門とは、神殿そのものを表すことばであった。古代の円筒印章の展開図では、神殿は、2本の柱から成る鳥居状のものと、垣根状のもので表されていた。つまり、バベルの塔というのは、神殿にある塔を指したのである。具体的にいえば、門と壁で囲まれたジグザグの道をいったのであろう。これが町を代表する名前になり、ギリシア人によってバビロンと呼ばれたのである。バビロンは聖地であり、さまざまな言語を話す人々が、この地に巡礼してきた。「創世記」では、バビロンの塔の建立の結果、人々の言語が混乱したとなっているが、経過は逆である。各民族や部族の接点には聖地があり、場合によっては、そこに偶像が祀られていたことと、そこでは、たがいに通じない、多種の言語が話されたことが、この物語の背景にある。さらに、この塔は、年ごとに建てては破壊することが習慣であった。日本の小正月に建てる巨大な左義長を焼くのもこれと同じである。イランの伝統では、破城といって、新年ごとに、神殿を破壊して建て直した。何年かごとに、神殿を建て直す習慣は、世界中にあるが、神の再生を祈願する意味がそこにはある。バベルの塔も、古くは毎年建てられ、毎年破壊されたのである。

異種の言語を話す集団が接触して生活したとき、界面では二重言語使用の現象が見られた。ほぼ定住する集団の間だけでなく、相手の集団が移動の途中で接触する場合も、この現象が見られたが、その期間は20年を必要としたであろう。

オスマン帝国の盛時、中東・北アフリカ・バルカン半島がその範囲に入っていた。その影響力は、中央ヨーロッパにまで達した。とうぜんのことながら、多言語国家であった。これら多言語の民族間に、ドルメッチあるいはドルメッチャーという職業人が介在して、異言語間の疎通をはかった。それは、いずれも「通訳」という意味で、小アジアの北部トルコ語方言の通訳を意味するトゥルマッチという語が、ハンガリー語に借用され、のちにドイツ語に入り、最終的にドルメッチとなったのである。この語の起源は、紀元前15世紀のミタンニの言語に出るタラム「通訳」にまでさかのぼる。この語は、アラビア語の衣をつけて、タルジュマ「翻訳、通訳」ということばで伝えられた。

タルジュマは、トルコ語ではテルジュメとして入っているが、この語がドルメッチの直接の起源ではない。

紀元前15世紀の言語に起源をもつことばが、現代にまで伝わっているが、この語は、おそらく、はるか以前から用いられたことばであったと思われる。始原の状態では、間に立つ通訳者はいなかった。その場合は、両者はたがいに恐怖心をもって相手を見たであろう。あるいは、相手を他界、異界の生き物で、野獣や野鳥と比べると、人間の形をしているが、ことばが全然通じない生き物と見たであろう。祖霊観念や神観念が発生した人々の間では、このような相手は、あの世から訪れた人々であると考えたであろう。雄略天皇が葛城山で狩猟をしたとき、一言主^{ひとことぬしのかみ}神に逢った。神は背が高く、容貌は天皇そっくりであった。天皇は、この人物が神であると知ったが、いずこの方であるかと尋ねた。この背高き人は、自分は神であるが、御身がまず名告ってください。そうすれば、自分も名告りましょう、という。天皇が名告ると、神は自分は一言主神だと応えた(『日本書紀』雄略天皇4年2月)。一言という神の名は、後世、諸国に数多くあった。柳田國男は、一言主という神は、託宣を特色としたという(『定本 柳田國男集』第9巻「一言主考」)。一言主は、異言語接触時代の初期において、きわめて短い語しか相互に通じ合わなかったことから、神格化された異人どうしであったと考えられる。このような段階の異人の発する短いことばは、もっとも神秘的で、神託として解釈されたのであろう。

キリスト教では、初めにことば(ことばにして、理法)があった。ことばは神と共にあり、ことばは神であった(『新約聖書』「ヨハネ伝」1)。すべてのものが、これによってできた。ことばには生命があった。この生命は人々の光であった(同、3-4)。ロゴスをどのように解釈するかによって、この個所の解釈がちがうようであるが、初めにことばがあった、というのは、異言語が独立し、接触していても、相互に通じ合わなかった時代の産物である。ここでは、一神教的な論理で話が進むが、ことばは一言主であり、言霊であった。

この段階では、言語接触において、言語や文化の伝達は十分に行われなかった。梵語仏典を漢訳するとき、例えば玄奘の場合、彼が原典を読んで、声を出して漢語に訳するのを、居並ぶ書記生らが書写していった。この場合は、異言語間の伝達は完全であった。古代ペルシア帝国は、インダス川からナイル川にいたる広大な範囲を統治したので、通訳の事業は重要であった。中央から発せられるペルシア語の公文書は、地方の官庁において、たちどころに当時の共通語であるアラム語やその地方固有の言語に翻訳され、通訳官によって声高に読み上げられた。帝国末期から、ペルシア語の中に、アラム語の単語が流入し、中世のパハラヴィー語の記法では、同じパハラヴィー文字で書かれたアラム語をペルシア語で訓読するという、ウズワーリシュンという独特な読み方が発達した。この場合も、通訳官は、どの言語で書かれていても、公文書を必要とする言語にその場で翻訳することができた。これと同じ例は、文字が発達した社会でも見られた。東アジアでは、同一の漢文が、異なった系統の言語によって、その言語独自の音によって読まれて理解された。フランソワ・カロン著・幸田成友訳著『日本大王国志』(平凡社、1967年)にいう。シナ語・日本語・朝鮮語・トン

キン語は、4つの言語で互いに相違し、従って甲は乙の1語をも了解し能わぬ。また、普通の文字も全然相違し、甲は乙とは同様ではない。しかしながら、彼らは別に1種の文字を有し、これを知り、これを学べる者は、その文字をもって、手紙および書類を書き、その書類を各自の言語で読みかつ理解することができる。同一の内容で4種の言語があるわけである（188頁）。これと同じようなことが、古代の多言語文明社会でも行われていたと考えられる。通訳は、特別の技能をもった者として尊敬された。この段階では、言語の構造や語彙が他言語に移動することも容易に行われたが、正確な内容をともなう文化の伝播が可能であった。

この段階は、予想に反してきわめて古い時代に、すでに成立していた。昔話の比較研究を国際的視野で行ってきた関敬吾博士に終世つきまとったのは、「遠く的一致、近くでの不整合」というジレンマであった（野村純一「その後の経緯」『昔話伝説研究』第16号、1991年）。ある中心部で発生した物語が、周辺部に伝播し、ある地域で停止して固定したとする。中心部では、以前の物語の改新された形が優勢となり、四方に伝播し、従来の形にとって代わるか、従来の形の物語はそのまま残り、その近辺で固定するかして定着する。中心部、あるいはその後新しく生じた中心部から放射された、改新された物語は、複雑な経緯で周辺に定着し発展してゆく。そこで、昔話の分布も、方言圏論と同じように、遠く離れた場所に、似たものがあり、近辺のものどうしでは、似ないものがあることになる。発生地である中心部の最古のものが、たとえそれが紀元前3000年紀のものであっても、最古のものとはいえないのである。それが偶然、記録された最古のものであるというにすぎないからで、それ以前の口承による伝承と、その伝播が考えられる。中心部の最古のものが最古の形であるとするのは、錯覚である。方言圏論の場合も同じことがいえる。

具体的にいえば、大陸から吹き寄せてくる文化の掃きだめといわれる日本列島や、ヨーロッパの島嶼部や山地・渓谷に残る文化は、常識的に考える古さ以上の古さを保っている。シュメール文明が残した「イナンナ女神の冥界下り」という物語がある。シュメール語版のあとの、アッカド語による「イシュタル女神の冥界下り」は、より充実した形で伝えられている。2つの言語による物語は、両方とも、女神が、自分の恋人（夫）であり、子供である男神（ドゥムジ、タンムズ）を、冥界に迎えに降り、冥界の女神に頼んで自分と男神に生命の水をかけてもらい、地上に帰還する話である。地上に生きて帰還した2神は、聖婚の床について、宇宙の豊穡に貢献する。「イシュタル女神の冥界下り」は、人間のみならず、動植物の豊穡をも目的とした、死と再生の儀礼の物語である。ところが、日本とギリシアの神話に残っている物語では、いずれも、男神が亡くなった妻を冥界に訪ねてゆき、冥界から地上に出る前に、タブーを破って妻の姿を見たため、妻を地上に連れ戻すことに失敗する。シュメール神話と記紀神話との間には、3千数百年の、ギリシア神話との間には2千年以上の距りがある。しかし、シュメール神話の方が古いとは、かならずしもいえないのである。日本神話では、イザナギノミコトは、死せるイザナミノミコトからやつのことで逃れ、みそぎをすると、両眼から日月神が生まれ、鼻からは反秩序と豊穡の神で、同時にスケープゴートでもあるスサノオノミコトが生まれた。女神が性交によって出産するのではなく、男神が出産する形の方が

古い。さらに、天照大神とスサノオノミコトは、天の安川でうけいをして子供を生む。天照大神が女神であるか男神であるかは問わないとしても、スサノオノミコトの剣からは女神が生まれ出た。神話では、独り神が子をもうける。ギリシア神話では、オルフェウスは音楽の名人で、豎琴をよくした。彼の妻エウリュディケは、川岸を歩いているとき、酪農と養蜂と葡萄の神アリストaiosに恋されて追われたが、途中、毒蛇に咬まれて死んだ。オルフェウスは、妻を連れ戻そうと思い、冥界に下った。しかし、地上に出る直前、妻の姿を確かめようとして後を振り向いたため、エウリュディケは冥界に引き戻された。その後、オルフェウスは、ディオニュソスの祭りで、トラキアの女たちに八つ裂きにされ、川に棄てられた。ギリシア神話では、男神オルフェウスが子を生むとはいっていない。その面では、合理的に発展した形跡が見られる。しかし、八つ裂きにされた身体を棄てるという行為は、エジプトのオシリスやディオニュソス自身にも見られる。これは、イモ類を細断して増殖させたり、死体を、穀物への肥料としたり、1粒の穀物が八つ裂きにされた身体の数と同じくらい増殖する願いと関係していたように思われる。もしそうなら、オルフェウスはディオニュソスの化身とされたと考えられる。つまり、この神話でも、男神が生殖力をもつのである。日本神話と同じように、死せる女神は男神が地上に出る直前、見るなを禁を侵したときにエネルギーを与え、男神に生殖力を与えるのである。死んで地下の冥界に行く女神は、刈り取られたり、枯死する穀物霊であった。八つ裂きにされる男神は、その穀霊を身に受けて再生させるのであろう。日本神話では、イザナミノミコトの霊を身につけたイザナギノミコトが出産する。シュメール・アッカド神話では、穀霊は幼い男神で、毎年殺されて冥界にゆき、毎年、母にして恋人である女神によって地上に連れ戻されて再生する（この形式は、聖母マリアとイエスの原形である）。この形式の神話は、より合理性をもった、改新形であり、オルフェウスとイザナギノミコト神話は、より古い時代に伝播した形式である。伝播は言語による伝達なくしては成立しない。伝達者は定住した人々である場合もあるし、移動する人々の場合もある。日本やギリシアに、古い時代に、シュメール人の移住者が到来して伝えたということではない。

古代中国では、新年に、村の入口の2本の柱に、白犬をはりつけにする習俗があった。別の習俗では、元日に、鶏を門柱に吊したものであった。2日、3日と日が変わるとに、別の動物を殺して、門柱の所に置いたが、のちに、動物の絵で代用するようになった。中国の陵墓の参道の左右には、何種類かの動物の石像が並んでいる。新年における死からの再生には、霊魂は、いくつかの動物の中を通らなければならなかった。陵墓の主人公も、再生するためには、何種類かの動物を必要とした。朝鮮の村の入口には、天下大將軍と地下女將軍という、高さ2～3メートルの樹木の根の部分で頭部につくった、男女2神の像が立ち、その下には、無数の石が積まれていた。この石の山は、悪疫が村に入るのを防ぐためだといわれたが、古くは、そこを通る人が、1つずつ置いた祭壇であったと考えられる。日本の鳥居の左右の柱は、雄柱・雌柱と呼ばれるが、古くは、両柱の間には石がはめ込んであった。その石は祭壇であった。伊勢神宮の内宮と外宮の本殿の床下にある、心の御柱みはしらの周囲には、800枚のかわらけが積んである。諏訪大社の各社の御柱おんはしらの周囲にも、多くの

石が安置してある。これらの石の1つ1つも、古くは祭壇であった。

古代エジプトの古王国時代の、例えば、カフアラ王のピラミッドには、400メートル余りの参道の入口の片方に、スフィンクスが立っている。スフィンクスは、古くは、王妃の墓といわれる場所にも立っていたと考えられる。日本の神社の前に立つ1対の狛犬に対応する。

シュメール時代から連綿として、中心に植物を置き、その左右に対称的に動物を配する図案があった。この図案は、シルクロードを経て東アジア全域に伝播した。日本にも奈良時代に輸入され、正倉院の宝物には多数の中心指向左右対称図案の実例が残されている（三笠宮崇仁「対称と非対称～シルクロードの西・東～」NHK 学園創立30周年記念古代オリエン特史特別講演会, 1992. 3. 29, レジュメ）。植物はいわゆる生命の木で、石をケルン形に積み上げた祭壇（あるいは山）の上に立つか、祭壇と合体したように図案化される。図によっては、石の祭壇そのものがあり、横に神（人）が立つ。日本の狛犬は、そのまん中には何もないようであるが、柱と呼ばれる神が拝殿に鎮座する。この中心の神は、元来は入口の祭壇に鎮座したのであるが、後退して狛犬と離れてしまった。その点で、ピラミッドとスフィンクスの関係と似ている。鳥居の左右の柱は、古くは男女神あるいは雌雄の動物で、その間に石の祭壇が置かれた。これ自身が神社であったと考えられる。左右の動物あるいは神々が、本来の神で、祭壇上の生命の木あるいは神は、二次的に発生した神であるかも知れない。先ギリシア時代のミュケナイ文明の図案に、中央に女神（ポツニア）を置き、左右に野獣（テローン）を配したものがある。この図では、女神はアルテミスそのもので、野獣は女神に隷属している。

言語をともなった文化である神話や物語のほか、言語をともなった図像も伝播する。単なる図像の伝播ではない証拠に、似たような観念がそれに付加されているし、一部の文化では、その図案が聖所として実現している。この図案の場合、周圍論的に見て、どれがより古い形で、どれが改新形であるかを決めるのはむづかしい。

日本の神社において、柱と呼ばれた神と、神社の入口の左右に位置する狐や狛犬の複合体は、左右に動物を従えた神の像をうけついでいる。より古くは、鳥居の左右の柱のまん中の祭壇に立てられた木が神であった。京都の太秦にある木嶋神社は、京都では最古の神社の1つであるが、この三本柱の鳥居の下にある円錐形石積みの上には、浄木が立ててある。これがひと柱の神の原形であった。のちになって、神の位置は奥に後退し、拝殿に祭られるようになった。両側の動物は、その神を祭る氏族のトーテムであったが、中心の神に従属したとも考えられる。これらの動物は、のちになって門神あるいは守護神として崇拝されるようになったのであろう。日本の神社形式は、シュメール時代の、両側に動物を配置し、まん中に生命の木を置いた図像よりは、かなり進化した形式である。神社形式では、神の位置が後退し、何よりも、その図像にもとづいて、神殿が建設されているからである。シュメールの図像は、ササン朝時代まで、ずっとそのまま、図像として伝承され、神聖視されたとはいっても、崇拝の対象となることはなかった。いっぽう、古代西アジアや古代エジプトでも、左右に動物を配置し、その奥に神殿、墓あるいは宮殿を建てた。この形式は、日本の

神社形式と同じように、図像と並行して発展した。このような神観念とその構造は、単なる図像だけの伝播では伝わらない。そこに言語が仲介しないと観念の伝達は不可能である。言語による伝達には、そこに介在する通訳者が浮かび上がる。

昔の人間は、動物すべて、ときには植物や岩石までことばを話し、人間のことばはその1つに過ぎないと考えていたようである。ことに鳥の声は、人間のことばと並んで、もつもと内容豊かなものであるとされた。昔、中国では、野蛮人のことばを、モズの啼き声に例えて、南蛮^{げきぜつ}駄舌^{だぜつ}といった。鳥の啼き声は、種類ごとに、ちがった啼き方をするので、それぞれ異なるが、一種類の啼き方が原則である。鳥の声は、「テッペンカケタカ」とか「チョットコイ」など、人間のことばに還元できるものがあるが、ただそれだけで、何の発展もない。しかし、中国では、鳥は舌を切ると人語を話すようになると信じられ、歳時記では5月5日の行事とする。中央アジアでは、子供のことばがおそいときは、鳥の舌を食べさすということを、ハンガリーの旅行家ヴァーンベリが述べている(『ペルシア放浪記』小林高四郎他訳、平凡社、1965年)。

イスラム教の聖典『コーラン』には、「われらは鳥のことばを教えられ、かつあらゆるものを授けられた。これこそまさしく、明白な恩寵である」とある(第27章)。中世イランの神秘詩人アッタール(1221年没)は、『鳥のことば』という叙事詩を残している。不死鳥の許で陶醉の境地に達して合一しようと欲した数千羽の鳥が苦しい旅をつづけて、やっとのことで30羽だけが不死鳥の許にたどりついた。ここでは、神秘主義者たちは、みな鳥に仮託され、鳥に語らせるのである(黒柳恒雄『ペルシア文芸思潮』近藤出版社、1977年、92-94頁)。ローマの広場フォルム・ロマヌムの北西隅に、ロストラという演壇が存残している。ロストラとは、鳥のくちばしの意味であった。ここでも、雄弁と鳥との深い関係が見られる(藤原武『ローマの道の物語』原書房、1985年、75頁)。

昔、アラーの神は、一人の商人に獣や鳥のことばがわかる力を授けた。この力を他人にもらしたら命はないと神にいわれた。商人は、自分の家にいる雄牛とロバの話すことばをみな理解し、ロバの悪だくみの裏をかいた。さらに雄鶏と犬とが話しているのを聞き、商人の秘密を知りたがっていた妻を打ちのめした。この話は、バートン版系統の『千夜一夜物語』の開巻最初の話である(前嶋信次訳『アラビアン・ナイト』1, 平凡社も同じ)。ユダヤの民話では、ある男がソロモン王に願って鳥獣のことばを理解できる力を授けてもらう。あとは『千夜一夜物語』の雄牛とロバの話と筋は同じである(M. ゴリオン編・三浦鞆郎訳『ユダヤ民話集』社会思想社、1980年、「動物のことば」)。イランにも、ソロモン王に鳥獣のことばを聞ける能力を授けた男が、彼らから、次々と不吉な予言を聞き出し、ついに災いが自分の身に及ぶのを知り、ソロモン王にその能力を返却する同じような話がある(F. ソブハーニー『ペルシア語教本』第3版、ベルリン/ニューヨーク、1971年、第52課)。佐々木喜善の不朽の名著『聴耳草紙』の開巻第1話は同題の昔話で、ある爺様が狐を助けてやったお礼に、それを耳にあてると、鳥獣虫けらの声まで何でも人のことばに聞こえる草紙をもらった。爺様は、鳥の会話から、町の長者の一人娘の難産をやわらげる方法を知り、娘を助けたので、長者から大層なお礼をもらって栄えてくらし、という筋である。『千夜一夜物語』と同じ

ように、冒頭にこの種の話がくるのは興味深い。その他に、聴耳頭巾や聴耳笠というものを被ると、鳥のことばがすっかりわかる。このような話は、極東の日本と西ヨーロッパにあり、それが互いによく似ている（『定本 柳田國男集』第6巻，319頁，「鳥言葉の昔話」）。このような話も、文字によって伝えられたのではなく、口伝えによったと考えられる。

文化理解の根本は、語学力に負うところが多い。当該文化に属する言語を知ることなく、その文化を深く知ることはむづかしい。学生時代、恩師の足利惇氏先生から、20歳台はもっぱら語学（複数）に没頭し、30歳台は培った語学力でテキストを読めと繰り返しいわれた。けだし金言である。

井本英一 本学教授（地域文化学科）